

悪霊 第二部・支那の三角帽子

悪
霊
第
二
部
・
支
那
の
三
角
帽
子

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
伊集院太吉……………満枝の父

昭和四（一九二九）年十月。東京市、北海道H市

I

東京――。

夜の上野駅は、盛り場の雰囲気を持ち込んで家路に着く人の群れと、さまざまな土地から運ばれてくる人の群れの淀みが渦巻いて、奇妙な熱気を作っている。

べらんめえの江戸言葉でわめく酔漢、得意げに横文字を並べるモダンボーイとモダンガールのアベック、きつい東北なまりで喋りながら頼りなげに視線を四圍にさ迷わせる行商人。様々な風体と言葉の埧塙であつた。

そのなかにあつて、改札近くに立ち、不安げにうつむくひとりの少女の姿があつた。市松模様をあしらつた柿色の地味な単衣の和服に名古屋帯をしめ、薄い羽織をひっかけ、三つ編みにした髪を垂らしたさまは、出かけなれぬ女学生のように。その眼は、時折、そこに待ち合せている人がもうすぐ現れるはずの改札に向けられていた。

猪俣佐和子であつた。

その年の七月に北海道H市のI高等女学校を卒業し、親に無断で上京した佐和子は、新聞記者を務める従兄の口利きで、小さな雑誌社に雇われた。そこで働きながら、今日が来るのを待っていたのである。

昭和四年十月十六日。夜九時。上野駅不忍口……。

あの日、川奈昭三の鞆丸を破裂させた後、伊集院満枝の部屋で、一夜、ベッドをともした。

その翌朝、満枝に、待ち合わせの場所として口伝えに告げられた日時と場所とを、佐和子は一日に数度は口のなかで反芻していった。

満枝さんが、北海道からやってくる。

やっとな満枝さんに会える……。

そう思うと、からだの芯から暖かいものがこみあげてくる。

だが、それだけではない。

目の前を、鳥打ち帽をかぶった眼光の鋭げな男が、俯き加減に通り過ぎる。警察ではないか、と佐和子の眼に不安の色が走る。

北海道でおかした佐和子の「罪」を、満枝は「罰」と言ってくれた。警察に捕まるのではないかと怯える佐和子に、「匿ってくれる人たち」と会えるよう手配してくれると言った。それが今日のはずだった。胸の奥に渦巻く不安を、満枝と会うことで消してしまいたかったのだ。

構内の柱時計が、九時を打った。そして改札に、黒いスーツにロングスカート、長身の女が現れた。佐和子の眼が輝いた。

伊集院満枝だった。

「満枝さん」

思わず駆け寄り、佐和子の手を、満枝は身を屈めて握りしめ、それから笑顔で囁いた。

「名前で呼ばないで」

「え？」

「わたくしは、あなたの故郷から出てきた女学校時代の恩師。あなたは、上京したての女学生。久しぶりに東京で会って、あなたのアパートで一泊する……」

「……………」

「本当にあなたのアパートに行くわけじゃないわよ。場所は、わたくしが案内するけれど、そのように振る舞ってね」

満枝は東京は初めてではないらしい。さっさと山手線に乗り、神田で降りた。駅からすたすと淡路町に向かって歩き、一軒の平屋に入った。奥まった目立たない家である。表札は出ていない。

「わたくしよ」

格子戸を軽く叩き、その向こうに現れた人影に対して、満枝は小さな声で言った。

「お連れしたわ」

かすかな下駄の音に続いて、鍵穴に鍵を差し込んで動かす音が響き、格子戸がいた。十五、六くらいの、赤い頬をした小柄な娘が現れた。満枝は振り向き、緊張した面持ちの佐和子を促した。佐和子は、ひと息飲み込み、格子戸をくぐって玄関へと入った。

狭い玄関をあがると、廊下を挟んで、右に六畳の和室、左は台所と三畳ほどの小部屋になっていた。満枝は六畳の部屋に入り、佐和子が続いた。

小柄な娘は、格子戸から顔を外に出し、左右を見回してから閉め、きちんと施錠した。

「お茶を出してさしあげてちょうだい」

六畳の部屋から、満枝の声がした。

「はい」

娘は下駄をぬいで玄関から上がり、台所へ向かった。お盆に湯呑みを二つと急須を並べ、六畳の間に運んだ。

小さなちやぶ台を挟んで、洋装の満枝と、和装の佐和子が向かい合って座っていた。ちやぶ台に湯呑みを並べる娘に、満枝が声をかけた。

「あなたとも久しぶりね。元気だった、佳代ちゃん？」

この物語の冒頭に、女衞ぜげんに買われて貧しい農村からH市に出てきた十五の娘が登場したことを、覚えてらっしゃるだろうか。

その娘、佳代がなぜ、東京の神田淡路町の平屋にいるのか、説明は後です。

満枝の問いには答えず、ただ笑顔でうなずくと、佳代はお盆を脇に挟んで六畳間を出、襖ふすまを閉めた。

佳代の足音が、小部屋の方に消えるなり、佐和子は膝を進めて満枝の隣に座り、その方に頭をもたせかけた。

「わたくし、ずっと……」

眼を潤ませる佐和子の手の甲を掌てのひらで覆い、満枝はその唇に唇を重ねた。長い接吻と抱擁のあと、佐和子は照れたように俯いて髪を直し、居住まいをただした。

「あの……満枝さん」

「なあに？」

「お訊きねしたいんだけど……」

上野駅からここに来るまでの間、ひたすら満枝が佐和子の近況について訊ねていた。仕事はどう？ どんなどころに住んでいるの？ おともだちはできた？

佐和子が務めているのは、社員が三人ばかりの小さな雑誌社だった。社会科学系の学者の論文を集めた『新時代』という雑誌を発行している。佐和子の役目はおっぱら雑用だったが、先日、書き上がった原稿を取りに、ある気鋭の学者の自宅まで行ったと嬉しそうに話した。なかなか好男子だったわ。女性の編集者とは珍しい、おおいにやりたまえて励ましてくださったの。

満枝は聞き上手だった。眼を細めて佐和子を見つめ、時折相づちを打ったり、笑みを返したりする。それが嬉しくて喋りながらも、佐和子の胸にはしだいに不安が募りつつあった。不安は、この家に着いた時について弾けた。佐和子は、満枝の体温をじかに感じることで、それを鎮めようとしたのだ。

抱擁と接吻で落ち着きを取り戻した佐和子は、初めて問いを發した。

「ここは、どなたの家なの？」

満枝は、澁しぶみなく答えた。

「あなたを守ってくださる方が住んでいるわ」

「それは、どなた」

「かつて、わたくしの父の土地で働いていた小作人よ」

「そうなの……さっきの娘さんは、その方の何にあたるの？ 妹さん？」

「そういうことになっているようね」

「そう、いうこと？」

満枝は、笑みを消して佐和子を凝視し、ゆっくりと口を開いた。

「これから、その人が来るわ」

来る……という響きに、再びかすかな違和感を覚えた。ここは、その人の家ではないか。満枝は続けた。

「彼について、立ち入ったことを聞くのは、遠慮してね。彼も答えないわ」

不安がまたも顔をもたげてきた。佐和子は満枝から眼をそらし、忙しく部屋のなかに眼を走らせた。ちゃぶ台のほか、何も無い。生活のにおいのようなものが、いっさいないのだ。貧しい人の暮らしぶりは、そんなものだろうか。裕福な家庭に育った佐和子には、想像がつかなかった。

満枝は、佐和子の肩を抱き、頬と頬をくっつけて、なだめるように言った。

「大丈夫よ。信じてよい人だから。わたくしが保証します」

玄関の格子戸が、小さく三度、叩かれた。

三畳の小部屋にいた佳代が玄関の三和土たつきに降り、静かに戸を開ける。着流しを尻からげにし、鳥打ち帽をかぶった男が入ってきた。

小沼健吾だった。

佳代を買った女衞が、盛り場の便所で死体となった後、行く当てのなくなった佳代を引き取ったのが小沼だった。

それから半年の間に、小沼と佳代が東京・神田淡路町の平屋に兄妹と名乗って住むようになった。

た経緯いきさつは、これも後で述べることになるだろう。

今は、小沼が伊集院家が所有していた土地の小作人であり、なぜか「警察には近づきたくない身」となって、佳代とともに東京の片隅で暮らしており、「佐和子を守ってくれる人」として満枝に選ばれたことだけを承知していただきたい。

「来てるかい？」

地下足袋を脱ぎながら訊ねる小沼に、佳代は、ええ、お二人とも、と答えた。

「そうか」

玄関からあがり、六畳間の襖の前に正座して、いま、帰りました、と告げた。

「入って」

満枝の声に、小沼は襖を開け、膝を進めて室内に入り、お嬢様、お久しぶりでございます、と頭を下げた。

「四月に別れて以来ね」

満枝は微笑んだ。

「お元気で、ご活躍のようね」

「いえなに、いろいろとございましてね」

小沼はちらりと佐和子を見やった。佐和子は身を固くし、小さく頭を下げた。

「こちらの方ですか」

柔らかな表情だったが、一瞬、眼が鋭く光った。佐和子は、その光に射抜かれたように、ますます身を強張こわばらせた。

「そうなの。ぜひ、あなたにお願いしたいわ」
「東京にご親戚がいらっしやるそうですね」

小沼に問われ、佐和子は頷いた。

「いまは、そのご親戚の家に？」

「いえ……。従兄は奥様とふたり暮らしですのすので」

佐和子は、しわがれ声でやっとなげた。

「弥生町の、はきもの屋さんの二階に住んでおります」

「弥生町ですか」

「ええ、会社が近いので……」

「ところ番地は？」

佐和子が答えると、小沼は口のなかで幾度か練り返し、満枝に向かって言った。

「お引き受けいたしますしよ。もう遅いから、今夜は、ここでお泊まりになるといい」

「あなたはどうかさるの？」

「これから、ちよつとした寄り合いがあるので」

失礼します、と小沼は頭を下げ、玄關へと消えた。格子戸が静かに開き、また閉ざされるのを、佐和子は身じろぎもせず聞いていた。鍵をしめて小部屋に入ろうとする佳代に、満枝が声をかけた。

「お布団を一組、用意して」

一組？ 佐和子が顔をあげると、満枝は微笑んだ。

「二組も必要ないでしょう？」

佳代が入ってきて、押入から布団を一組取り出して敷くのを、佐和子は無言で見つめた。見つめつつ、数日前、原稿を取りに行った学者から聞いた話を思い出していた。

大森というその学者は、荻窪に一戸建てを構えて住んでいた。

書齋に通され、小用で近所に出かけているという学者を待つ間、所在なく書棚を眺めると、横文字の背表紙に混じって、大鐘閣から出版された『マルクス全集』が並んでいた。

やがて帰ってきた学者が、不在の非礼をわび、出来上がった原稿を渡した。それから、運ばれた和菓子や茶請けに、四方山話をした。

「昨日も、素性の知れぬ男がやってきてね」

学者は、羊羹ようかんをほおばりながら苦笑した。

「何かと思ったらカンパを要求するんだ。社会問題の原稿を書いて稼いでいる僕が、人民を塗炭とんだんの苦しみから救うため日夜官憲の眼をかくぐって活動している者に、せめて金銭的な援助をするのは当然だと大きな顔で言いやがってね。仕方がないから、三十円あげておいたよ」

「素性の知れない人に、ですか？」

「まあね。もちろん、僕だって社会問題売り物にしているわけだから、その稼ぎの一部をコミュニティのために働いている人たちに預けることに、別に異論はない」

コミュニティが「共産主義」の意であることを悟るのに、しばらくかかった。学者は続けた。「でもその男は、名前はおろか、本当に党員かどうかも明かさななんだぜ。もちろん、非合法活

動だし、誰が党員で誰が党員でないか、中央の幹部しか知らないというくらい秘密にしているわけだから、名前を明かさないと当然だが、金をたかりにきた偽者かもしれないじゃないか」

「党員……？」

「おやおや、君は、雑誌社に務めているわりには、世間知らずなんだねえ」

学者は、こんなこと他の人に言いふらさないでくれよ。特高に目をつけられちゃ、かなわんかならな、と笑って続けた。

「なんせ河上肇先生なんて、訪ねて行ってコンミニストと名乗れば、見ず知らずの相手に百円、二百円といった大金を気前よく渡しちゃうっていうからねえ。ずいぶん、偽者にだまされたというじゃないか。あれだけ本が売れても貧乏なのは、そのせいだなんて噂だよ」

『資本論』の翻訳やベストセラー『貧乏物語』で、佐和子もその名を知っていた元京都帝国大学教授の逸話をひたすら聞いて聞いていた佐和子は、社に戻って編集者のひとりにそれとなく話しかけてみた。大森先生にうかがったのですけれど、コンミニストと名乗る人たちが、学者や作家を訪ねてきて、お金を要求することがよくあるんですってね。

原稿に朱を入れる手を休めて茶を飲んでいた三十半ばの編集者は、少し首を傾げた。春先の大検挙で壊滅状態だと聞いたが、再建の動きがあるのかな、とつぶやき、仕事に戻った……。

そういえばあの男、名乗らなかつた……。

満枝と枕を並べ、佳代が敷いた布団に潜り込んだ佐和子は、ふと、小沼のことを思いだした。

「ねえ」

満枝の耳元で、咳せきのように訊ねた。

「さっきの人って……党員なの？」

満枝はしばらく佐和子を見つめ、無言で接吻した。顔を赤らめた佐和子に、静かに告げた。

「今は、知るべきじゃないことよ」

II

翌日。

銀座の歌舞伎座の前は、平日の午後というのに芝居見物にやってきた有閑婦人たちでにぎわっていた。盛装した女性たちが挨拶をかわし、入り口に吸い込まれていくなか、小沼健吾は煙草を吹かしながら、しよざいなげに立っていた。

昨夜とは打って変わった、緞の着流しに黒の羽織、きちんと髪をなでつけいっばしの遊び人気取りである。

「落とししましたよ」

振り向くと、友禪染ゆうぜんぞめの着物に紺の羽織ゆうぜんまき、襟巻えりまきをした女性が、腰をかがめて何かを拾い上げ、小沼に差し出した。

「こりゃ、どうも」

差し出された紙入れを受け取り袂たもとに入れた小沼は、頭を下げて女性に背を向けた。女性もまた、小沼に背を向け、人待ち顔で通りを眺めている。

「昨夜の方は、もう帰られたんですか？」
不意に、背を向けたまま、小沼が言った。

「ええ」

女性——伊集院満枝もまた、表情を崩さず、口だけを動かした。

「わたくしも、明日の朝、発つつもりよ」

「そうですか」

「あなたのことを、党員じゃないか、と聞いてたわ」

小沼はわずかに顔を顰めた。満枝は続けた。

「今夜、銀座に来て」

そのまま去っていった。小沼はそっと袂から紙入れをとりだし、なかを改めた。

百円札がぎっしりと詰まっていた。百枚はありそうだ……。

まず、これを同志に届けねば……。小沼は新しい煙草に火をつけ、歩き出した。

「銀座」とは、満枝が泊まっている銀座のホテルを言う。満枝の父が定宿にしていた。幼い頃、父と母に連れられて上京した満枝は、支配人がわざわざ部屋まで出向いてきて挨拶したことを覚えてい

る。日が落ちてから、小沼がホテルに行くと、すでに玄関前に洋装の満枝が立っていた。裾長の派手なワンピースに、腰までのコート、襟巻きに帽子といういでたちである。顔に白粉を塗りたくり、口紅や頬紅を必要以上にさした面差しは、昼間とはまるで別人のようだった。

会うごとに化粧や着るものを変えるんだな……。小沼は思った。非合法活動をしている者同士が接触する時は、非常な注意を払わねばならない。横のつながりを当局に把握されてはならないからだ。

だが、満枝の「変装」は、必要があつてというよりも、ブルジョア令嬢のお遊びでしかないように小沼には思えてならなかった。当局の弾圧により、資金的に苦しい日々が続いている。煎餅布団が一枚しかないアパートに四人で潜んでいる者もいる。それを思うと、苦々しいものがこみあげてくるのを禁じ得ない。

「こっちよー！」

モガというのだろうか、フラツパーというのか、夜の盛り場で西洋かぶれの紳士の腕にすがって闊歩している不良少女のような仕種で、満枝は手を振り駆け寄ってきた。

「あたい、お腹すいたなあ。何か食べさせてよ」

昼間の令嬢ぶりとは声まで打って変わって、小沼の腕にしがみつき、しなだれかかってくる厚化粧の満枝に、小沼は狼狽を隠すのがやっとなかった。

西洋料理店に入り、ビールとソーセージを注文する。満枝はビールを飲み干し、ソーセージをたிரらげ、ワンピースの袖で唇を拭いた。袖口が口紅で赤く汚れたが、気にも留めない。そんな満枝の前に、小沼は膝に両手を置き、背筋を伸ばして言った。

「例のもの、確かに届けました」

「あ、そう」

「よくあんな大金を……助かります」

「あんたも知ってるでしょ」

満枝は、蓮はすっぱな口調で言った。

「祖父と父と二代、小作人の血と涙を吸い上げて築いた財産からすれば、はした金だわ」
「いや、よく堀田さんが……」

その名を言いかけて、小沼は口を噤つぶんだ。十年前、父親が世を去って以来、その莫大な財産は確かに満枝が継いだ。だが、まだ成年に達していないため、父親の親友であった堀田弁護士が法定後見人として財産を管理している。上京費用はともかく、一万円もの大金を引き出せるとは思えない。

満枝はにやにやしながら、いたずらっぽい眼で小沼の顔を覗き込んだ。

「堀田なんか、あたいの言いなりよ」

言いなり？

あの堀田が？

訝いぶしげな面持ちの小沼に、満枝は続けた。

「たいしたことじゃないよ。あいつのきんたまきんたま、掴んで、ちよいとひねってやったんだ」

けらけらと笑う満枝に、小沼は溜息をついた。

「ねえ、ご機嫌斜め？ ごめんね」

テーブルに覆い被さるようにしなを作る満枝に、小沼は、いえ、と呟くように言った。

「ただ、ご無理をなさっているんじゃないかと心配しましたから」

「無理じゃないわよ。それにあんたのとこ……」

満枝はからだを起こし、煙草に火を点けて言った。

「金の出どころなんか気にしてられる状態じゃないんでしょ？」

小沼の臉まぶたが大きく開き、その瞳は凍りついたように満枝に向けられた。

「国体を変革することを目的として結社を組織したる者」「結社の役員その他指導者たる任務に従事したる者」を「死刑または無期もしくは五年以上の懲役もしくは禁錮」に処すると治安維持法が改正されたのは、前年の昭和三年六月である。

「国体の変革」とは社会主義革命に他ならない。

当時、貧しい人々の救済を訴える政治団体は多かったが、「国体の変革」を掲げる団体は、一つしかなかった。小沼が所属していたのは、捕まれば死刑に処せられることもありうる非法組織だったのである。

その年、昭和四年四月、当局は一斉検挙に踏み切り、四千人を超える「黨員」や関係者が逮捕された。「党中央」と呼ばれる最高幹部は根こそぎ獄中に放り込まれた。

辛うじて検挙を逃れたのは、まだ若い少数の幹部だった。彼らは当局の眼を逃れて各地を転々としながら、「党」を再建すべく生き残りの「黨員」たちに指令を発していた。

日市で出会った身よりのない佳代を東京に連れてきたのは、哀れに思って庇護したわけではない。非合法活動には当局に知られない「隠れ家」が必要だ。いい年をした男の独り暮らしは周囲から疑いをもたれやすい。そこで、それぞれの「隠れ家」には「ハウスキーパー」と呼ばれる女性配置されていた。「黨員」の身の回りの世話を焼くだけでなく、夫婦を装うことで周囲の疑

念を避けようとしたのである。

小沼は、こうして「隠れ家」造りを任務とする一方、資金調達の役目も負っていた。一斉検挙で風潰しにされた拠点を、短期間である程度回復することができた。だが資金調達は思うに任せなかつた。従来、「党」の資金源の大部分は、「社会主義の祖国」すなわちソビエト連邦から送られてきていた。しかし、「祖国」とのつながりの深い幹部が逮捕された今、国内で集めるしかない。主な手段はカンパである。左翼に同調的な学者や作家から寄付金を募るのだ。

満枝が差し出した一万円は、小沼や同志たちが必死で集めたカンパの総額に匹敵する額だった。だが、小沼の驚きは、その金額よりも、せつば詰まった「党」の内情を、満枝が知っていることだった。

四月から始まった一斉検挙は、新聞紙上では報じられていない。警察が、捜査を円滑に行うため厳しく報道を規制しているからである。組織の全容や党員の名前を知っているのは、限られた幹部だけである。末端の「党員」は、時折連絡にやってくる特定の「党員」の顔と偽名を知っているだけで、横の繋がりが全くない。「党」が壊滅状態にあることを知らない末端党員も少ない。

それほど秘密保持に厳格な「党」の内情を、どうやって満枝は知り得たのか。

まさか……。

小沼の脳裡を疑念がかすめた。

満枝は、資金提供を餌に近づいてきた「当局のスパイ」ではないのか？

「誤解しないでよ」

小沼の疑念を見抜いたように、満枝は言った。

「あたいは、あんたが気の毒だから、同情して、助けてあげてるだけ。あんたたちが何をしたいのかも知ったことじゃないわ」

「じゃあ」

小沼は反駁した。

「なぜ、あの娘さんを守れ、と……」

「佐和子さんのこと？ 簡単よ」

満枝は、指を伸ばして小沼の頬に触れた。

「あんたが、いちばん頼れそうだから」

マニキュアを塗った満枝の指が触れたとたん、小沼のからだの芯がぞくりと震え、脳裡に刻まれた記憶が蘇った。

満枝の父、伊集院太吉は、小沼にとっては恩人だった。

貧しい小作人の子は、尋常小学校を卒業すれば、親とともに畑仕事に従事する。だが、成績の良かった小沼を、太吉は援助してくれた。高等小学校を卒業した後は、H市内の中等学校に通わせてくれたのである。

中等学校時代に貧民救済運動に関わった小沼は、卒業後も故郷には帰らず、全国を飛び回り、小作争議や労働争議に参加した。初めて故郷に帰ったのは八年前、伊集院太吉の急死を聞いたからだだった。

労働運動に加わった小沼を、太吉は「裏切り者」と罵り続けた。しかし、恩人であることに変わりはない。その葬儀の席で、小沼は初めて満枝と出会うのである。

十歳の小学生だった満枝は、黒いセーラー服で、喪服姿の母親の隣に座っていた。年齢にはふさわしくない整った美貌に、小沼は驚いた。隣で放心している母親とは対照的に、その美貌は氷細工のように冷たく動かなかった。

葬儀の翌々日、小沼は独り太吉の墓に詣でた。墓前に花を供えることで、太吉から受けた恩にけりをつけ、労働運動に専心する心積もりであった。

ひとときわ立派な墓石の前で手を合わせ、立ち上がって踵を返すと、すぐそこにセーラー服姿の美少女が立っていた。

満枝だった。

学校から帰る途中なのだろうか。肩からかばんを提げている。

彼女の視線は、墓石と、小沼とに交互に注がれていた。やがて小沼は、自分に注がれる眼差しが、ある一点に向けられていることに気づいた。股間だった。

思わず息を呑んだ小沼に、満枝は大またに近づいた。次の瞬間、小沼は股間に激しい衝撃を覚えた。

満枝は、小沼の睾丸を蹴り上げたのだ。目がくらみ、その場にしゃがみこんだ。立つこともできず、両手で股間を押さえてうずくまるしかなかった。睾丸はもとより、鳩尾が火のように痛み、嘔吐がこみあげてきた。

やっと顔をあげると、満枝は、頬を紅潮させ、口を半ば開き、肩を大きく上下させていた。唇

が動いたが、何を言ったのか、耳には入らなかった。

満枝はくるりとこちらに背を向け、走り去った。

あの時、なぜ満枝が小沼の急所を蹴ったのか、いまだに知らない。あらためて問うのものはばかされた。

久しぶりに帰郷した小沼は、伊集院家の土地で働く小作人たちの窮状を知った。各地の葬儀に加わり、悪辣な手段で小作人から搾取する地主たちを見てきた小沼だったが、伊集院太吉のやり方は、負けず劣らず過酷なものだった。

小沼は実家に戻り、農作業に従事しながら、ひそかに組織作りを始めた。H市内の活動家とも連絡を取りつつ、数年の歳月をかけて準備を進めた。

争議の火蓋を切ったのは三年前だった。一斉に仕事を放棄し、満枝の法定後見人である堀田弁護士に、待遇の改善や小作料の引き上げ等の要求を突きつけたのだ。

だが、争議は半月もたなかった。ある夜、小作人たちの会合を終え、家路に着いた小沼を、やぐざ者が取り囲んだ。さんざん殴りつけ、腕を折り、足蹴にし、小便をひっかけて去ったのだ。

これで諦める小沼ではなかったが、他の小作人たちが怯えた。結局、わずかな待遇改善と引き換えに、争議は幕を下ろした。

たたかいに敗れた小沼は、H市を去った。本州に渡るべく、港の待合室で連絡船を待っていた小沼の目の前に伊集院満枝が現れた。

紺色の女学校の制服姿の満枝は、無言で小沼の隣に腰をおろした。不意のことに言葉を失った

小沼に、満枝は言った。

「あなたは、立派だったわ」

十五歳になり、ますます輝きを増した美しい横顔を凝視していると、満枝は続けた。
「いつか、あなたを助けてあげる」

短くそう言って立ち上がり、満枝は去った。

東京に帰り、尖鋭的な労働運動に従事していた小沼が「黨員」となったのはその一年後だった。その頃から、小沼のもとに、二〜三十円が入った封書が届くようになった。差出人は満枝だった。堀田弁護士之眼を盗み、都合をつけてくれたのだろう。

今年の春、満枝から届いた封書には、「卒業したら、一度上京してお目にかかりたい。お会いできる日時を指定して欲しい」とあった。だが、すでに「黨員」となった以上、うかつには会えない。満枝は、「党」の敵である地主階級に所属している。当局の罨ということも考えられる。

小沼はひそかにH市に戻り、満枝の近辺を探った。当局とのつながりを示す様子は一切なかった。小沼は、そこで偶然であった佳代を、ハウスキーパーにするため連れ帰った。そして、「十月十六日」と指定したメモを少女小説の本に挟み、満枝に当てて送ったのだった。

「佐和子はね」

満枝の甘ったるい作り声に、小沼は回想から現実に戻った。

「あたいが唯一、心を許すともだちな。うぶで、まっすぐな子よ。それだけに心配なのよ」

「ほんとうにそれだけですか？」

小沼は言った。当局の眼を盗んで非合法活動を続ける小沼には、地方から家出同然に上京してきた小沼を守ってやる余裕などない。「党」のために大金を提供してくれた満枝の頼みでなければ、当然断っている。

「そうね」

満枝はちよつと小首をかしげて口を噤んでいたが、やがて言った。

「あの子、あんたたちのためにも、役に立つと思うわよ」

訝しげな顔つきの小宮に、満枝は続けた。

「ああ見えて、あの子、強いもの」

その日の深夜――。

「やれやれ、もう客も来そうにないね」

京橋に近い銀座通り、盛り場からは少し離れて、「手相」「鑑定」としたためた紙を垂らした机に座り、紫色の頭巾をかぶった老人は、日々、冷たさを増す夜風に肩をすくめて呟いた。

地下鉄の終電も出た頃合いだった。人通りも少ない。商売道具一式をかばんに納め始めると、あの、と頭上で声がした。

洋装の少女が独り、立っていた。足首まであるワンピースのスカートに、腰までのコートを羽織り、襟巻に帽子といういでたち。薄暗い提灯のあかりに照らされた顔は、西洋の映画女優と見まがう美少女だった。

「もう、おしまいなの？」

少し連の入った口調だが、鈴を鳴らすような心地よい声だった。

「なんだね、こんな時分に、手相を見てほしいのかい？」

老人が訊ねると、美少女はこくりとうなずいた。

「そうかい。もうそろそろ帰り支度をおもっていたところだが、こんな別嬪べっぴんさんが見てほしいというのなら、話は別だ。いいですよ、そこにお座りなさい」

老人と向かい合って木製の椅子に座った美少女は、右手を差し出した。ふっくらとした掌てのひらから伸びた長い指は、意外にもたくましかった。老人は、ふんふん、ともっともらしく頷きながら虫眼鏡で掌を眺めた。

終電もすぎた深夜に、独りで手相を見てほしいというからは、何か嫌なことがあったに違いない。悩みを聞いてあげて信頼させるのが商売のこつだ。

「あなた、からだは丈夫そうだね」

「そうかしら」

「生命線が深い。これはからだが頑健な証拠だ。うん、刃物で切ったような、きれいな線だ」

「でもあたい、からだは丈夫だけど、心があんまり丈夫じゃないの」

「ほう」

向こうから切り出してくるとは好都合だった。悩みを聞いてあげてから、まずその悩みを肯定し、それがいずれ好転すると言ってやればいい。楽な相手だ。

「嫌なことがあると、一日、寝込んでしまうの。だから、仕事が長続きしないのよ」

「なるほどな」

老人は白いあごひげをしごいた。

「確かに、感情線が中指と人差し指の間まで伸びてる。これは、情が深いということだよ。情が深いだけに、また、悩みも深いのだな」

「おじさん、よくわかるねえ」

美少女は感嘆したように言った。

「そうなんだよ。今日も、仕事場で嫌なことがあってね」

「どうしたんだい」

美少女は、仕事場での同僚とのいさかいや、居丈高なくせに好色な眼を向ける上役、盛り場で知り合った男との喧嘩などをしゃべった。老人は、いちいち肯定してやるだけでよかった。

「ああ、気持ち晴れ晴れしちゃった」

美少女は満足げに笑った。

「ありがとう。おじさん、すごい手相見だ。あたい、すっかりおじさんが好きになっちゃった」

「この年で、あなたのような別嬪べっぴんさんに惚ほれられるとは、長生きはするものだ」

「もう、帰るの？」

「ああ、さすがに、年寄りに夜風はきつい。とっとと退散するよ」

「お礼に、家まで送ったげる」

「おやおや、お嬢ちゃん、あなたこそ夜道は危ないよ。おうちはどこだい？」

「どうせ、鉄道は終わってるし、円タク拾うお金もないんだ。おじさんを送って行ってから、誰か泊めてくれそうなひとを捜すよ」

「そりゃあ、あんまり捨て鉢すぎる」

老人は眉をひそめた。

「嫁入り前の大事なからだだろう。やけを起こしちゃ、いけないよ」

美少女は口を噤んだ。まっすぐに老人を見つめた。射るような視線に老人はたじろいだ。美少女はすぐに、こぼれるような笑みを作った。

「おじさん、ますます気に入っちゃった。あたいのこと、心配してくれるんだね」

行こ、と差し出した手が、老人の腕に絡みついた。

老人の家は、勝鬨橋を渡った裏通りにあった。狭い路地が交差した奥まった平屋である。

「まあ、何もないが、お入り」

袂から鍵を取り出し、格子戸の鍵穴に差し込む。

「婆さんが死んでから、独り暮らしでね。幸い、布団は一組ずつある」

「ねえ、おじさん」

ひどく乾いた声音だった。老人は振り向いた。

美少女は、両手を腰に当て、冷ややかな面差だった。さきほどまでの媚びを含んだ愛嬌は消え、かわって獲物を狙う獣のような眼差しだった。

「嫁入り前の、大事なからだ、と言ったわね」

甘えたような声音は、大理石のように堅い響きに変わっていた。

「ああ、そうだよ」

老人は、豹変した美少女の様に、うろたえながらも言った。

「わたくしが将来、誰かと結婚すると、手相に出ていましたの？」

「え……？ ああ……」

老人は口ごもった。

「その……あんたも、いずれはいいひとの嫁になりたいだろ？ 女なら誰だって……」

「そんなこと、思ってもみなかったわ」

唇の端をわずかに歪めて笑みを見せつつ、美少女はゆっくりと老人に近づいた。

「まっぴらよ。その醜いもので、からだを刺し貫かれ、心まで差し出すなんて」

言うなり、長いスカートがふわりと舞った。

美少女の膝が老人の股間に食い込んだ。

老人は、喉の奥で呻き声をあげた。膝が崩れ、地面に座り込み、横倒しに倒れた。両手を股間にあてがい、激しく痙攣した。

「ひとの心を見抜くこともできない……下手な手相見の罰よ」

美少女は、老人を仰向けにし、踵で陰囊を踏みつけ、体重をかけた。老人は白眼を剥き、大きくからだをのけぞらせた。肉塊が弾ける音が響き、老人は血反吐を吐いて動かなくなった。

美少女は、碎け散った肉塊の感触を確かめるように、踵を動かして老人の股間を踏みしめた。陰囊が張り裂け、老人の袴がみるみる赤く染まった。

美少女は空を見上げた。黒雲から、三日月が半ば顔をのぞかせていた。その妖しい光に照らされ、上気した頬を振るわせながら、美少女は眼を閉じ、幾度も幾度も吐息を漏らした。

「朝ご飯、できました」

襖の向こうから声がした。小沼健吾は、掛け布団をはねのけ、上半身を起こした。

夜着が、汗でびっしょり濡れていた。頭の芯がずきずきと重い。

夢か……。口に出して呟いてみた。佳代がまた言った。

「運んでも、いいですか？」

「ああ、頼む」

夜着をかき合わせて布団から這い出て、ちゃぶ台の前に座った。

佳代が、米櫃を両手で抱えて入ってきた。さらに、味噌汁の入った鍋と、茶碗をちゃぶ台に並べ、布団を畳み始めた。

重いまぶたを開け、畳んだ布団を持ち上げ、押し入れに入れる佳代の腰のあたりにさまよわせながら、小沼はため息をついた。

なんて夢だ……。

夢の中で、小沼は二人の女を犯していた。一人は洋装の伊集院満枝であり、もう一人は、佳代だった。

しゃもじでご飯と味噌汁を椀によそい、佳代は部屋を出た。小沼は、己が股間を見下ろした。

肉棒が、激しくそそり立っている。

どうしたんだ、俺は……。

小沼は髪の毛をかきむしった。

かつては、遊郭に出入りし、娼婦を抱いたこともあった。だが、H市での小作争議に敗れ、社

会を変えるには革命しかないとい心を決めて以来、女と酒を断ち、修行僧のような生活を送っていたのだ。

あの女のせいだ……。

ご飯に味噌汁をぶっかけ、せわしなくかきこみながら、小沼は思った。

満枝の美貌が、俺の心をかき乱す。

小沼にとって満枝は、まず憎悪の対象だった。八年前、伊集院太吉の墓前で股間を蹴られて以来、小沼の想念のなかで、満枝は打ち倒すべき地主階級の象徴となった。階級的憎悪が、抑圧された性欲と結びつき、それは、満枝を陵辱するという妄想となって現れたのだ。脳裏に満枝を思い描きつつ、娼婦を抱いたこともある。

だが、なぜ佳代を？

H市で出会って以来、小沼は佳代を、ひたすら庇護していた。ハウスキーパーとしてこの家に置いてからも、指一本触れることはない。黙々と家事にいそむ佳代は、コミュニストとして守るべきプロレタリアート階級の象徴だったのだ。それなのに……。

夢の中で、小沼は満枝を殴りつけた。むせび泣く満枝を犬のように四つんばいにさせ、髪の毛を掴んでねじ上げながら犯した。その後、眼を閉じて身じろぎもしない佳代の着衣をゆっくりと脱がせ、その肌をむさぼった。心の裡に潜む醜い欲望を突きつけられたような夢だった。